

ありし日の思ひ出：追懷

著者	武藤，虎太
雑誌名	龍南
巻	2 0 0
ページ	1 7 - 1 9
発行年	1926-12-25
その他の言語のタイトル	ありし日の思い出：追懷
URL	http://hdl.handle.net/2298/8895

ありし日の思ひ出

武 藤 虎 太

龍南會雜誌第二百號記念特輯發刊の企てに對し當時の思出をとの依頼狀が來たが生憎出張中であつた。其後廿五日迄延期したからは非にとの書狀が重ねて文藝部の井上君から届いた。回顧すれば龍南會雜誌を創めた時自分は編輯の任に當り、型の如く論說文苑雜錄覺報などの欄を設けて寄稿を募つたが段々原稿の集りが悪くなつて、遂には人々を勧誘しても名篇が集まらず、結局自分が埋め草を搔て餘白を満たすやうな事もあつた。今日多士濟々の時代には右様の苦心も有るまいが坐ろに當年を思へばそれが二百號を重ねると聞いては、歴代雜誌部委員の勞苦を多とせざるを得ないと同時に、俄かに筆を執て出鱈目を書く氣になつた。餘白の埋め草ともならば幸慶の至りである。

自分が五高に入したのは明治二十年十月創立の際であつた。當時は舊城内の西端古城の家屋を借用して授業を開始された其頃は豫科三年本科二年其後補充科が設けられて是が二年通計七年で、中學校卒業者は豫科三級に入學するの掟で有つた。帽子の徽章は柏と檉櫨の葉を交互に出し中央圓型に高の字を表し、本科は白線三條豫科二條補充は一條であつたと思ふ。其後度々學制の改正があつて補充科を廢し豫科本科を合して三年となり帽子の白線も二條となつた。

創立の頃までは高等官蓄馬の名残で校長も教頭も皆馬を飼つたものだ。其際學校で乗馬三頭馬丁一人を置きそれに校長の馬と教官として聘せる警部の馬と合計五頭を素鞍のまゝ山崎練兵場(今の新市街)に牽き出し、各組五人宛交互に乘馬生を簡拔し頗る

硬教育法で教官は馬の後脚一肢を曲けて乗馬生をして後方から走りがゝりに馬のさんづに飛乗らしむるので、時には馬の臀部に頭を打つけ少からず馬を驚かした事もある。追々馬術の進歩に伴れて鞍を置く、鐙を許す拍車も許さるゝ愈自由遠乗となる其頃は去勢せざる馬多く、自分は一度遠乗の際田舎出の駄馬の後を追驅けられ如何に留手綱を引けども控けども留まらばこそ終に馬上から抛り出され、船馬橋の欄干に打つけられ足の頸を挫いた事がある。兎も角學校として乗馬術を練習せしめたのは五高が創始だと思ふ。さるにても乗馬馬丁の經費は如何にして支辨せられたものか後に聞けば、圖書費の大部を振向けられたものだろうな。初代野村校長の面目躍如たるものがある。

明治二十年頃は中學でもベースボールが創められて居たので、五高にも野球の一團が有つた併し器具と云へばバットとボールとシートだけでマスクもミットも臍當も胴もない皆徒手空拳で打つ摺むので、随分危険であつた。而かも鉛を包んだ皮張りの球で捕捉も容易でなかつた。殊に規則とても詳細の規定はない。ファウルは何度やつても三打の外で時間の懸ること夥しい。デッドボールだからとて一壘を取るの利得もなく結局打たれ損である。バントだの犠牲打などゝ云ふ小惻かな方法も知らぬ随分未熟なものであつた自分は一度古城内の球場で二壘手となつた。折しも真向ふから日光直射して打者の球を受け損し鼻下に中り其場に卒倒し上齧の齒二本齒齦部から折れた。今も前齒一本は接齒である。斯様の事を思へば今年五高野球部が九大で優勝し更に京都で優勝したなど實に隔世の感がある。

雪荷流の弓術師範に生駒先生と云ふのが居られて、既に古城時代から弓術を指南せられて居た、道場と云ても不完全なもので城堞上に標的を樹て數人並んで的に向ふソレ矢も随分有つたが、大抵城壁間の連濠に墜つる、本城の石垣まで届くのは客易になかつた、古城の域内に大きな芭蕉があつて、秋の葉枯の頃其莖を的に矢を放てば索々と音を發する、其面白さに一日猛者連一同頻りに芭蕉を射る、折しも校長巡視し來り此狀を見て赫然激怒弓道の本義は何處にあるか、殊に借地内の樹木を損するなど以て

の外の振舞なりとて早速弓術稽古に差止を命し、生駒先生は哀れ謹慎の身となられた。其後特赦に遭ひ弓術も復興する事となつた。

創立の際は九州各縣猛者連の集りとして、時々賄征伐が行はれた。時の幹事椿先生は餘りに下品なりとて先生が何處かで實施せられた自炊制度の實行を勧められた。そこで物品購入係や保管係や出納會計夫々の係を設け自分が其委員長となつた、何がさてやつて見ると無經驗者の揃ひとあつて、殘飯は廉價に拂下ぐる毎週献立も御馳走多く、月末計算の結果一日食費九錢に騰つた。諸賄賂の時より一日一錢餘の騰貴となつて、寮生の小言紛々たる有様當時米一升代金八錢以下なれば、一日一錢の騰貴は學生に多大の影響を與へたのも無理はない。早速殘飯利用策を講じ献立に豆腐滓などを交へて調節を謀り、是事を後任者に引繼いだ事がある。自炊制度も實學問として頗る修行になつたと思ふ。其後此制度如何なりしや。

自分等の卒業少し前に嘉納治五郎先生が文部省から五高校長に轉せられた。由來熊本は柔劍弓槍等武藝の盛なる所である。先生命めて講道館柔道を唱へ、寄宿寮寢室の疊を階下の自習室に敷き詰め、投の型や絞め固めの業から亂取りなどやらされ、後には本館背後の控室を疊敷きに改め殆んど柔道場となつた。自分は前齒を挫いて居るので型だけの稽古で有つたが、仲々技術拔群の猛者が出た。高等學校で柔道を課する事となつたのは蓋し五高が嚆矢であらう。劍道は古來最盛の場所柄で五高創立以來隆盛を極め、技能優秀の士彬々輩出した。堀貞赤星陸治氏などは腕を鳴らしたもので今も尚稽古を勵んで居る。

自分は明治二十年入學同二十五年大學に進み二十八年から四十年春迄は母校教授であつたので記憶をたどれば牛の涎のだらだらと盡かきける所がないが委員から依頼の紙數には制限がある、先は是處で筆を擱く。